

ゲート戦記      ヒーロー、彼の地にてかく斯く戦えり

ミッツ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ネオ・アクシズの野望を阻止し、惑星エルピスに平和を取り戻したヒーロー達はそれぞれの日常に戻っていった。

だが、ダカールに現れたゲートによって短き平和は終わりを告げる。

ヒーロー達は再び終結し、平和を取り戻すため異世界に挑む！

果たして、彼らの行く末に待ち受けるものは…

この作品は『ゲート 自衛隊 彼の地にて、斯く戦えり』とSF小説『ヒーロー戦記』のクロスとなっています。

作中では惑星エルピスにゲートが開くため、エウーゴ軍が原作における自衛隊に当たりますが、登場キャラは原作のものを無理やりヒーロー戦記に当てはめたりしています。

また、ガンダムとウルトラマンの大きさは全て仮面ライダー側に合わせています。

その他、コンパチシリーズ故に無理矢理な部分もありますが、こまけえこたあいなんだよ！の精神で読んでいただけると幸いです。

作中の疑問等質問はネタバレにならない範囲で感想欄でお答えします。

目次

|                |   |
|----------------|---|
| プロローグ          | 1 |
| Z E U S、異世界に立つ | 6 |

## プロローグ

温暖な気候と豊かな資源に恵まれた緑の惑星、エルピス。

この星には3つの大陸があり、それぞれで独自の文明が栄えていた。

3つの大陸にはいずれにも正式な名称があったのだが、別の呼び方が広まり、正式な名称を知る者は少なくなった。3つの大陸の俗称をそれぞれ「ガンダム大陸」「ライダー大陸」「ウルトラ大陸」という。

ガンダム大陸ではモビルスーツをはじめとするロボット工学が発達し、ライダー大陸では遺伝子工学やサイボーグ技術が発達し、ウルトラ大陸ではウルトラ族と呼ばれる特殊な超能力者が育っていた。

共通歴99年、頻発するテロへの対策としてエウーゴ共和国、ライダー連邦、光の国の3国は共同で対テロ特別組織であるZ E U Sを設立した。

それと時をほぼ同じくして世界同時多発的にテロが発生し、各都市を結ぶ主要インフラは断絶され、多くの都市部が孤立する事態に陥る。

これに際し、Z E U Sはすぐさま出動を決定し、エウーゴ共和国の主要都市であるダカール市の解放を謳うテロリストの鎮圧に向かった。

こうして始まったテロとZ E U Sの長きにわたる闘いは、ガンダム大陸最大の軍事力を持つアクシズの軍事クーデター、それによって誕生したネオ・アクシズのアポロン総統との最後の決戦を経て一先ずの終焉を迎えた。

こうして世界は平和な日々を取り戻すことができたのだが、その平和はとても短いものとなってしまおうとは、この時は誰もが思っていなかった。

アポロン総統がZ E U Sによって倒され、ネオ・アクシズが崩壊し、

一連のテロとの戦いが終わった日からちょうど1年が経とうとしていたその日、世界各地では戦いの終焉を祝し、犠牲者の追悼を目的とした行事が行われていた。

ダカール市も例外ではなく、市主宰の追悼式典が市の東に位置する公園でしめやかに行われていた。

参列者の多くは先の世界同時多発テロの犠牲者遺族であり、この追悼式典自体も一般市民と退役軍人の呼び掛けで開かれたものである。

追悼式典は午前10時過ぎ、テロ発生と同時に始まった。式は滞りなく進行し、厳粛な空気が辺りには流れていた。

そして、テロによって父を亡くした少女が平和への願いを読み上げているとき、それは突然現れた。

時刻は午前11時15分、最初に気づいたのは会場の警備に駆り出されていた若い警察官である。

目の前に霞がかかったかのように揺れ、視界がボヤけるのを感じた彼は目頭を揉んで頭を振った。そうして再び前方を注視した彼の目に飛び込んできたのは、巨大な門であった。

警察官です呆気にとられ門を眺めていると、門の扉がゆっくりと開いていく。

その向こうから現れたモノに、警察官は今度こそ開いた口が塞がらなくなった。

それは軍隊である。だがそれは、観閲式などで見るようなエウーゴ軍の近代的な軍隊ではなく、歴史ドラマで見るとような槍と鎧で武装した中世の重装歩兵であった。よく見れば弓兵や馬に股がった騎兵もいる。

まるで映画の撮影みたいだ、と思う警察官の胸に強い衝撃が走る。警察官が下に視線を向けると、左胸に矢が刺さっており、制服のシャツがじんわりと血で染まっっていく。

「なんだよ、これ…」

その言葉を最後に警察官は前のめりに倒れ、中世風の軍団から歓声にも似た雄叫びが上がる。それは、地獄の開演を知らせる合図であった。

軍団は式典会場を襲撃し、死体の山を築き上げた。

ある者は槍で胸を貫かれ、ある者は剣で首を断たれ、ある者は騎兵に踏み潰され、ある者は脳天に矢が突き刺さり、ある者はドラゴンに似た有翼爬虫類型生物に喰われ：

遺族も、警備の警察も、市の職員も、招待客も、マスコミも、議員も、男も、女も、子供も、老人も、区別なく皆等しく虐殺の対象となった。

後の調査で、この最初の襲撃により犠牲になった市民は1千人にのぼったとされる。

もはや、大規模テロといっても過言ではない状況に現場は混乱し、救助を求める電話で市の回線はパンク寸前であった。

この緊急事態に政府の対応は早かった。幾多ものテロの脅威を経験が生きたのだ。政府は知らせを受けてすぐに非常事態宣言を発令し近隣住民に避難を呼び掛けるとともに、軍に鎮圧部隊と救助隊の編成を要請した。

それと平行し武装集団の情報を収集した結果、武装集団はそのほとんどが剣や槍といった前時代的な武器で武装しており、モビルスーツや重火器といったエルピスにおける主力兵器は所持していないことが判明する。

また、人間よりも遥かに巨大な体躯を持つ人型生物も確認されたが、全体から見ればその数は非常に少なく問題ないと判断された。

唯一の懸念はドラゴンに似た、火を吹く有翼爬虫類型生物を操り空から攻撃を仕掛けてくる飛行戦力の存在だったが、これには空中戦に特化したMS特殊部隊が対処することとなった。

そして、最初の襲撃から3時間後、エウーゴ軍による反攻作戦が開始された。

エウーゴ軍の主力戦力はネオ・アクシズとの戦いを経験した歴戦の兵士達であり、いずれもがモビルスーツや重火器の近代兵器を装備しており、その威力は絶大であった。

エウーゴ軍の火器は武装集団の鎧を容易に粉碎した。

つい先程まで虐殺者であった者達が、今度は屠殺場の豚よりも簡単

に命を奪われていく。

武装集団も反撃を試みるも、彼らの多くは剣や槍を振り上げる前に蜂の巣にされるか、爆風によって四肢を引き裂かれた。

中には遠距離から弓矢で狙う者もいたが、モビルスーツの装甲の前にはかすり傷一つ付けるに至らない。

一部で懸念されていた人型巨体生物も、ビームライフルの集中砲火により討伐された。

こうして、エウーゴ軍の反攻作戦は武装集団が死傷者と捕虜を合わせて6万人に対し、エウーゴ軍側は死傷者無しという結果に終わった。

この反攻作戦によって、エウーゴ軍は武装集団により一時的に占領されていた公園周辺を奪還し、武装集団を門の向こう側に撤退させることに成功した。

エウーゴ共和国政府はすぐさま捕虜の尋問を開始するも、捕虜が喋る言語はエルピスに存在していない、全く未知の言語であった。

意思の疎通にエウーゴ政府が頭を悩ませる中、手を差し出したのは光の国だった。

光の国はウルトラ族の中でもテレパシー能力に長ける人員をエウーゴに派遣し、尋問に協力する事を申し出た。

光の国はダカール市民が受けた被害に心を痛め、当初から救護部隊である銀十字軍を派遣するなど協力的であったが、捕虜の証言は被害者救済に役立つと判断した上での申し出であった。

完全な善意による申し出をエウーゴ政府は喜んで受けとると、捕虜の尋問は劇的に進んでいった。

それによって、武装集団は門の向こう側に存在する「帝国」と呼ばれる国の侵攻軍であり、門のこちら側にある国を侵略する目的で侵攻してきた事が判明する。

エウーゴ政府は閣僚会議の結果、国交が結ばれていない以上、門の向こうの帝国を国家として認めるわけにはいかず、武装したテロリストと見る他無い。

国交を結ぶ場合でも、相手を交渉のテーブルに無理矢理にでも座ら

せ、ダカール市と市民が受けた被害を賠償させ、首謀者を処罰させなければ到底国民が納得しない。

よって、エウーゴ共和国は門の向こうに軍を派遣し、現地を調査すると共に、帝国にエウーゴ共和国の意思を示して交渉を以て要求を飲ませる必要がある、と声明を発し、エウーゴ軍の門内部、通称「特地」への派遣を決定した。

この声明に主要国であるライダー連邦は賛成の意思を示しエウーゴに対して物資支援を申し出、光の国も国の方針上消極的賛成にとどまるも人的支援は必要に応じ行うことをエウーゴ政府に申し出た。

共通歴102年10月 エウーゴ軍特地派遣隊第一陣がダカール市より出動。彼らは惑星エルピスの人間として歴史上初めて異世界に足跡を残す。

こうして世界は短い平和を経て、新たな激動の時代を迎えようとしていた。

そして、この物語は二つの世界の邂逅により、人生の分岐点を迎えるに至った特地、そしてエルピスの人々が如何なる決断を下し、どう振る舞ったかを3人のヒーローを通して記したものである。

しからば、まずは3人のヒーローが初めて特地の土を踏み締めたところから描かなければなるまい。



## Z E U S、異世界に立つ

・エウーゴ共和国軍特遣部隊アルヌス前線基地

異世界の軍隊によるダカール市への侵攻、通称「ダカール事件」から3ヶ月が経った頃、門の向こう側にあたる場所にはエウーゴ共和国軍の前線基地が建設中であった。

現地の言葉でアルヌスと呼ばれるその場所は周辺に目立った建物は無く、基地の外には延々と続く地平線と遠くに青々とした森林が見えるのみである。

そんな異世界の景色を面白く無さげに眺める青年がいた。

周囲は軍服や作業着といった格好の者がほとんどの中、その青年は革ジャンにジーパン、指貫グローブという比較的ラフな格好をしている。佇まいも軍人といった感じではない。

黒髪に黒い瞳には強い意思が感じられ、顔立ちも整っており女性からも好まれそうなスタイルの良さもある。

実際に、遠目から青年に視線を向けて何やら囁き合う女性隊員の姿も見えた。

そんな視線に気づいた様子は見せず、青年は小さくため息をつく。

「ここが異世界か。なんか思ってたより普通だな。」

どこかがつかりしたような口調で一人呟く青年の後ろから、エウーゴ軍の青い制服を着た青年が近付いてくる。

「普通だなんて、光太郎さんはどんな世界を想像してたんですか？」

「そりゃあ異世界だぜ。やっぱりドラゴンとか魔法使いが空飛んでたり、でっかい魔王城があったりするもんだと思ってただけどなあ。」

「RPGのやり過ぎですよ。」

軍服の青年が呆れ気味にツツコミを入れると、光太郎と呼ばれた青年は拗ねたように唇を尖らせる。

「でもよ、ダカール事件の時はドラゴンに乗った敵もいたそうじゃねえか。アムロも戦ったんだろ？白いドラゴンスレイヤーとか、ダカールの英雄ってニュースでやってたぜ。」

「やめてくださいよ。僕は英雄なんて柄じゃ無いです。」

心底嫌そうな表情で光太郎の言葉を否定する青年。彼こそ、エウーゴ共和国軍において『白い流星』の異名を持つトップエース、アムロ・レイ少佐である。

彼はダカール事件の際、モビルスーツ部隊の一員として反攻作戦に参加し、多数の敵航空戦力を撃破する抜群の功績を上げた。

その功績をもって、エウーゴ軍上層部はアムロの一階級昇進を決定したのだった。

ただ、アムロ本人は自分の活躍を持ち上げメデイアに露出させることで、軍のイメージアップを狙う政治的人事の匂いを感じ、素直に喜べないでいた。

「そうは言っても、お前のおかげで救われた人がいたのは疑いようの無い事実だ。彼らにとっては、アムロは救いの英雄なんだろう。」

「ダンさんまで。」

「おっ！なんだダン、たまには気の効いた事を言うじゃねえか。」

「たまには、が余計だ。」

苦笑を浮かべながら新たに現れたのはウルトラ警備隊の制服を着た男性。名をモロボシ・ダンと言う。

このアムロ・レイ、モロボシ・ダン、南光太郎の3人こそ、ネオ・アクシズとアポロン総統の野望を阻止し、世界を救ったZ.E.U.Sのメンバーである。

彼らとはある任務を受け、異世界へと派遣された。

「それにしても、これからどこに行けばいいんだ？」

「確か、派遣隊の誰かが迎えに来るってハロが言っていましたけど。」

光太郎の問いにアムロが答えると、丁度よく3人の前にジープが止まる。

ジープのドアが開くと、中からメガネを掛けたエウーゴ軍の軍人が出てきた。

「失礼、皆さまがゼウスの方々でしょうか？」

「ええ、はい。そうです。」

アムロが問いかけに答えると、メガネの軍人は畏まった様子で礼をとる。

「ハザマ大将の御命令によりゼウスの皆さまを本部にお連れすることになりました、ヤナギダ中尉です。どうぞこちらにお乗り下さい。」

そう言ってヤナギダはジープの後方ドアを開く。アムロ達が礼を言っただけでジープに乗り込むと、ヤナギダも運転席に乗り込みジープを進ませる。

4人を乗せたジープが基地内を進んでいく。

窓を開き外からの風を感じていると、ゼウスの3人の鼻を異質な感覚が擦る。

「この匂いって…」

「焼けた肉と硝煙の匂いだな。」

窓の外に目を向けると建物が途切れ、基地の外の様子がはっきりと見てとれた。

そこに広がっていたのは抉られた大地と、おびただしい数の弾痕。そして、物言わぬ死体の山であった。

「…つい先日、帝国とその周辺国による連合軍の反攻がありましたね。概算で約6万人。ダカールと合わせて約12万人。これで帝国が我々の力を正しく認識してくれるといいんですけどね。」

外の現状に言葉を失ったゼウスの面々に、ヤナギダはそう説明する。

その説明を受けつつも、アムロの脳裏にはアルヌスに来る前に行ったゼウス本部で行ったやり取りを思い出していた。

話は数日前に遡る。

・ダカール市参謀ビルZEU本部

ダカール市にある軍事施設、参謀ビル。その5階のフロア丸一つがZEU本部となっている。

先のテロとの戦いが終結した後に活動を停止していたZEU本部には、約1年ぶりにメンバーが集まっていた。とはいっても、急な召集だった為に集まる事が出来たのはアムロ、ダン、光太郎の3人のみである。

3人が並んで立つと、総司令であるネットワーク・コンピューター

ハロ9000から音声流れる。

「皆さん、お久しぶりです。早速ですが、皆さんに集まって頂いた理由について説明します。」

「おいおい、ちよつと待てよ。せつかく久しぶりにこのメンバーが集まったんだから、もう少し感慨深い事でも言うべきじゃねえか？」

「人工知能である私に光太郎さんは何を求めているんですか？ コンピューターの私に感慨を求められても、最初からそんなものプログラムされていません。」

「けっ！ 相も変わらず口の減らないコンピューターだぜ。」

光太郎の文句に対し、機械音声にも関わらずどこか呆れたように聞こえる返答をする。

そんな1人と1台にアムロとダンは懐かしさを覚えていた。

「さて、話が逸れかけましたが今回皆さんに集まって頂いたのは、皆さんに特地の実地調査に行ってもらうためです。」

「実地調査？」

「はい。エウーゴ政府が帝国に責任者の処断と賠償を求め軍を侵攻させ、門の向こうに拠点を建設中なのは皆さんもご存知でしょう。しかしながら、未だに敵の拠点に対し侵攻する具体的な計画は出来ていませんが、その理由を光太郎さんはわかりますか？」

「俺に聞くなよ…」

「現地の情報が十分に集まって無いからだろ。」

光太郎が答えられない質問にダンが答えると、正解とでも言うようにハロ9000からピロンツ！と機械音が鳴る。

「その通りです。ダカール事件で確保された帝国の兵士から向こう側の世界の情報は得られています、聞いた話と実際に見た情報ではどうしても乖離している部分があります。なので、既に現地に駐屯している部隊でも調査隊を編成し、近隣の集落や帝国首都までの道中に派遣する事が決定しています。」

ハロ9000の説明に光太郎はなるほどと頷く。

「つまり、敵を知り己を知らば百戦危うからず、つてやつだな。」

「微妙にニュアンスが合って無い気がするのですがまあいいでしょ

う。それに加え、エウーゴ軍の事情も影響しています。先のテロとの戦いから1年、今もまだエウーゴ軍は戦力回復の途上にあります。また、水面下に潜っているテロリストの残党の存在もあり、軍は大規模な軍事行動を起こせません。以上のような事情もあり、小隊による調査及び現地人との接触を以て帝国の人間と交渉の切っ掛けを得る考えにあるのですが、我々ゼウスにも調査隊に同行してほしいとエウーゴ政府から要請が来ています。」

「へえー、面白そうじゃねえか。異世界なんてワクワクするな。」

そう言つて光太郎は笑顔を浮かべるが、アムロとダンは難しい表情になる。

「ハロ9000、本当にそれだけが今回の任務なのか？こう言つてはなんだが、正直僕たちが参加する意味が少ない気がするんだが…」

ダンの言葉にアムロも同意を示す。Z E U Sは対テロを想定した部隊である。いくら動かせる戦力に限りがあるとはいえ、わざわざ自分たちを調査隊に同行させる理由としては弱いと二人は感じていた。

「流星ダンさんとアムロさんです。今まで語つた任務は表向きの任務に過ぎません。本当の任務は現地の派遣部隊の監視です。」

「なっ!?!?どういう事だよ、オイッ!」

「現在のところ、安全面を考え門の中に入れるのは軍の関係者に限られています。一部の政府関係者はその現状が門内部での軍閥化に繋がるのではと警戒しています。」

「そうか、政府はティターンズの二の舞を犯したく無いんだな。」

ティターンズは元はエウーゴ軍のエリートを集めた独立性の強い部隊であったが、ネオ・アクシズに同調しクーデターを起こそうとしたのだった。

幸いZ E U Sの活躍や内部での裏切りもあつてクーデターは失敗したのだが、ダカール市をはじめとする主要都市が占領され、対ネオ・アクシズにおいてエウーゴ軍は戦う前から大きなダメージを受ける事となった。

後に軍内部でもティターンズに対する危険性を指摘する者がいたが、ティターンズから賄賂を受けていた軍上層部や政府関係者が揉み

消していたことが公表され大きな問題となっている。

### 閑話休題

「政府は我々に特地での軍の行動を監視し、場合によっては現地で鎮圧することを望んでいます。無論、こちらの任務は秘密裏に行ってもらいいます。」

「なんつうか、思ってたよりも厄介そうな任務だな。っていうか、アムロ的には自分たちの仲間を監視することになるけど、そこんところはどうか？」

「確かに思うところはあります。けれど、過去の事を考えると派遣軍の独走を危惧するする人がいても仕方ないと思いますし、そこは自分の役割として割りきれますよ。」

アムロの答えに光太郎は納得したのか、そうか、と短く返して頷く。「光太郎さんにも今回任務の意義を理解して頂いたところで、詳細について説明していきます。まずは、出発の日時についてですが…」  
こうして、各種細かい点を詰めていきながら、3人は出発までの準備を進めていった。

話は特地に戻る。

アムロが意識を再び基地の外に戻すと、数十名の隊員が重機を使って諸国連合軍の死体を回収していた。

死体は感染症の恐れがあるため、1ヶ所に纏めて土に埋められる。その遺骨や遺品が遺族の元に届くことは恐らく無いだろう。

アムロは名も知らぬ魂に黙祷を捧げた。願わくば、彼らの死が意味のあるものだと祈りながら。

そして、目の前に広がる異世界の地に思いを馳せた。

この地には未採掘の資源が山ほど眠っていることが予想される。未知の物質や、魔術の存在もだ。目立った環境汚染も無い。おまけに技術、軍事格差は圧倒的だ。

このような状況、強かな野心家であれば考えることは自明の理である。

特地とエルピスの安定がZEUSの双肩にかかっていると  
もよい。

そのような事を考えていると、ジープが真新しい白い建物の前に止まる。

「着きました。こちらです。」

ヤナギダに促され3人はジープを降りる。

アムロは強い責任感と僅かな不安感を胸に、ホコリ一つ落ちていない玄関に足を踏み入れた。